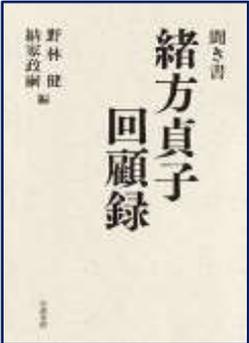




難民の命を守る活動に挑んだ「女性リーダー」



今も世界の1パーセント以上の人が、故郷を追われ劣悪な状況下で助けを待っている。「救いの手を届けたい」その純粋な思いを行動で示した女性「緒方貞子」の生きざまを、教え子二人がインタビューを重ね「回顧録」としてまとめた。今また、危機的な状態になっている紛争地帯で彼女が実践してきた「人間の安全保障」を続けることはできるのか。このバトンを次につなげたい。



聞き書 緒方貞子回顧録

2015年 岩波書店

野林 健、

納家 政嗣 (編)

[1100-1]



緒方貞子の経歴

1927年、犬養毅を曾祖父に持ち、政治家、外交官の一家の長女として生を受け、アメリカ・中国で幼少期を過ごす。大学卒業後アメリカに留学。2度の留学の後、博士論文「満州事変研究」をまとめる。1991年から2000年まで日本人として初めて国連難民高等弁務官を勤め、2003年から2012年まで独立行政法人国際協力機構（JICA）理事長を務めた。2019年10月没 享年92歳

国連の仕事に初めて関わったのは、大学の講師時代の1976年に国連総会に日本政府代表団の一員として出席したことであった。その後、ユニセフでの仕事や、国連人権委員会の日本代表などを経て、1991年、「国連難民高等弁務官」に就任。

その頃、世界では湾岸戦争や紛争が勃発していた。アジア人で女性の新任国連難民高等弁務官はいきなり重大な決断に迫られる日々を送ることとなる。

彼女は国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の枠組みの中の援助では救いがなかった、国境を越えることもできない「国内での難民」や「元武装集団にいた難民」等の救済、という新たな状況にも立ち向かっていく。

政治を動かす、軍を動かしてやり遂げていくという、今までにないやり方を展開する。徹底した現場主義を貫き、政治のダイナミクスを研究していたことを活用し、実務に活かしていく。後に「人間の安全保障」を実践していく基盤ができた。

人道支援のUNHCRを退任後、開発援助を担うJICA理事長に就任。人道支援から開発援助へのシームレスな支援が必要と訴え続けていたことを実践する時がきた。JICA改革を「現場主義」、「人間の安全保障」、「効果・効率性と迅速化」を柱に進め、担当者も増え、仕事も増えた。何よりも、よりいっそうの士気の高まりで成果が上がっていった。

「緒方さんの根にあるのはヒューマンイズムということになるのでしょうか」との問いに対する答えが素晴らしい。「耐えられない状況に人間を放置しておくということに、どうして耐えられるのでしょうか。そうした感覚をヒューマンイズムというならそれはそれで一向に構いません。でも、そんな大それたものではない、人間としての普通の感覚なのではないでしょうか。（中略）見てしまったからには、何かをしないとならないでしょう？したくなるでしょう？理屈ではないのです（後略）。

彼女のヒューマンイズムあふれる「言葉だけではない実践力」はもっと素晴らしい。緒方貞子には、人道主義と政治的リアリズムがバランスよく共存する。

回顧録ができあがった後の緒方貞子の言葉も印象深い。「この回顧録を読み返して初めて気づかされた点はいくつかあった。ひとつは自分から手を挙げて始めた仕事はあまりなかったということである」。経歴・環境すべてがベストのタイミングでマッチしたところに「緒方貞子」が生まれた。世界が、歴史がこういう人を待っていたのだ。歴史は繰り返される。今、光の見えない世界にも、希望の光さす日はきっとやってくる。（ルナ）

図書コーナーには本人が著した図書もあります。難民に寄り添った日々が綴られています。



緒方貞子 私の仕事
国連難民高等弁務官の10年
と平和の構築
2002年 草思社
緒方 貞子 (著)

[1100-1]

For tomorrow



紛争と難民
緒方貞子の回想
2006年 集英社
緒方 貞子 (著)

[1100-1]

